

# 負担少ない内視鏡治療「ESD」

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

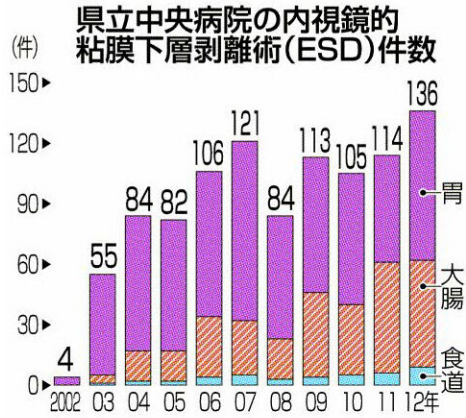
《 41 》

早期がんに対して行われている内視鏡治療。開腹手術に比べて入院日数が短く、患者への負担が少ないやさしい治療として注目されている。近年、内視鏡を使って、より大きな腫瘍を切り取れる新しい治療法「内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）」が県立中央病院で行われている。

内視鏡科科長の小嶋裕一郎医師によると、ESDの治療対象となるのは胃がん、食道がん、大腸腫瘍。いずれもリンパ節



小嶋 裕一郎  
内視鏡科科長  
期がなが適用  
となる。同病  
院では全国で



## 広範囲の腫瘍を切除可能

も早い時期の2002年に導入。県内で最も多いESDを実施し、その件数は増加傾向にある。

ESDは腫瘍の下に薬剤を入れて浮かせ、電気メスではぎ取る方法。従来の方法はワイヤを腫瘍に引っかけてつまみ取るため、一度に切除できる大きさに限界があった。ESDは腫瘍の下にもぐり込んではぎ取るため、切除できる大きさに制限がなく、狙った範囲を正確に切り取れるのが特長だ。

同病院の入院期間は胃が5日、食道が7日、大腸が4日。外科手術と比べて短く、体への負担が非常に少ない。また外科手術を行った場合、たとえば胃では一度にとれる食分量が減るなど機能が低下するが、ESDではそういったリスクを回避できる。さらに胃カメラや大腸カメラを使うため、胸やおなかに直接カメラを入れる胸腔鏡手術や腹腔鏡手術の小さな傷すら残らないメリットもある。

以前から保険適応だった胃や食道に対し、12年4月に保険適応となった大腸は、壁が薄く屈曲が多いため腸管に穴が空きやすく、内視鏡や電気メスの操作が難しい。高度な技術が必要となるが、医療器具、技術の進歩は著しいという。

小嶋医師は「ESDは患者さんの体にやさしい画期的な治療法。微妙な病変ほど、医師によって内視鏡治療を行うかどうか判断が異なるため、主治医とよく相談してほしい」と話している。

第2、4木曜日に掲載します